森北町遺跡

第20次調查

発掘調査報告書

2004 神戸市教育委員会

森北町遺跡

第20次調査

発掘調査報告書

2004 神戸市教育委員会

阪神・淡路大震災から、はや10年の歳月が過ぎました。山と海が一望できる美しい神戸のまちは復興しつつあります。しかし、 内面的な本当の復興はまだまだ歳月が必要と考えられます。

今回報告します森北町遺跡第20次調査は、民間マンション建設 に伴う発掘調査です。調査の結果、鎌倉時代の掘立柱建物、落ち 込みなど、貴重な資料が発見されました。

この調査報告がこの地域に暮らしていた先人の足跡を明らかに することで、地域の文化財保護や普及の資料として、市民の皆様 をはじめ、多くの方々に広くご活用いただければ、幸いです。

最後になりましたが、和田興産株式会社をはじめ、調査にご協力 いただきました方々、関係諸機関に対し、厚く御礼申し上げます。

平成16年12月

神戸市教育委員会教育長 小川 雄三

例 言

- 1. 本書は神戸市東灘区森北町3丁目4・5番に所在する、森北町遺跡第20次調査の発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査は、共同住宅「ワコーレ森北町3丁目」の建設に伴うもので、神戸市教育委員会が和田興産株式会社からの委託を受けて、現地調査を平成15年11月10日~12月16日まで実施した。調査対象面積は645㎡である。また、出土遺物の整理業務については、平成16年度に委託を受けて、神戸市埋蔵文化財センターで実施している。
- 3. 現地での調査は中居さやかが担当し、本書の作成は中村大介の協力を得て、中居が担当した。本文は II.3 の記述については中村、それ以外の部分は中居が作成した。
- 4. 現地での遺構写真は中居が撮影した。遺物写真については奈良文化財研究所牛嶋茂氏の指導の下、西大寺フォト杉本和樹氏が撮影した。但し遺物写真のうち金属製品の X線写真は中村が撮影した。
- 5. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「西宮」、神戸市 発行の2,500分の1地形図「青木」「本山」「深江北」を使用した。
- 6. 本書で使用した方位・座標は平面直角座標系第V系(旧日本測地系)で、標高は東京 湾中等潮位(T. P.)で表示している。
- 7. 今回の調査で出土した遺物は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
- 8. 現地での発掘調査および遺物の整理にあたって、和田興産株式会社には調査費用の負担を含む多くの御協力をいただきました。

目 次

序	
例	言
目	次

I. はじめに	1
1. 森北町遺跡の立地と歴史的環境	
	1
(2) 周辺の遺跡	2
2. これまでの調査成果 ····································	4
3. 調査に至る経緯と経過	5
(1) 調査に至る経緯	5
(2) 調査組織	6
(3) 発掘調査の経過	6
Ⅱ. 遺構と遺物	9
1. 調査の概要	9
(1) 調査の方法	9
(2) 基本層序	9
2. 遺構と遺物	12
(1) 掘立柱建物	12
(2) 掘立柱建物に伴わないピット	17
(3) 溝	19
(4)土坑・落ち込み	20
3. 金属製品	24
Ⅲ. まとめ ···································	25
1. 遺構について	25

2. 遺物について -------25

挿図目次

fig. 1	森北町遺跡の位置 1	fig. 16	SB0515
fig. 2	森北町遺跡と周辺の遺跡 (S=1/25,000) 3	fig. 17	SB0816
fig. 3	森北町遺跡調査地点 (S=1/5,000) ······ 4	fig. 18	SB0716
fig. 4	調査区地区割図 7	fig. 19	SB09
fig. 5	作業風景 (1) 7	fig. 20	掘立柱建物出土遺物18
fig. 6	作業風景 (2) 7	fig. 21	ピット出土遺物18
fig. 7	調査区南壁 9	fig. 22	SD02~04, SR01
fig. 8	調査区壁面土層断面図10	fig. 23	SK08 · 09 · · · · 20
fig. 9	調査区の遺構11	fig. 24	SK03 · 06 · 08~10 · 12 · · · · · 21
fig. 10	掘立柱建物12	fig. 25	土坑出土遺物22
fig. 11	SB0113	fig. 26	SX02出土遺物23
fig. 12	SB0213	fig. 27	出土金属製品24
fig. 13	SB0314	fig. 28	出土金属製品24
fig. 14	SB0414	fig. 29	同上X線透過像(IX100,60kVp,3mA,40sec)…24
fig. 15	SB0615		

表目次

表1 森北町遺跡調査一覧 …… 5

写真図版目次

図版 1 調査地全景 (南西から) 調査地全景 (東から) 図版 2 SB07~09 (北から) SD02~04・SR01 (北西から) 図版 3 SK03 (南から) SK08 (南から) SK08断ち割り (西から) SK08断ち割り (西から) SB04-p10・SB09-p12 (南から) SB06-p2・SP129 (東から) 図版 5 SB09-p4 (南から) SP95・SP96 (西から) SP12 (南から)

図版 6 SK08出土遺物

図版7 ピット出土遺物 土坑出土遺物

I. はじめに

1. 森北町遺跡の立地と歴史的環境

(1)遺跡の立地

森北町遺跡は、神戸市東灘区森北町 $2\sim4$ 丁目を中心に存在する遺跡である。現在は阪 急電鉄神戸線沿いの閑静な住宅街となっているが、明治18年測量のS=1/20,000仮製地形 図によると、水田や住宅地の散在した地域であったことがわかる。

遺跡は六甲山南麓の標高約20~30mの丘陵裾部に立地する。1940年代後半には遺物が採集されているが、1982年に共同住宅建設に伴い、初めて発掘調査が実施されている。これまで19次に及ぶ発掘調査が行われた結果、弥生時代~中世にかけての複合遺跡であることが判明している。遺跡は東西約700m、南北約250mの東西に長く広がり、阪急神戸線を境に南は南北の傾斜がやや緩く変化している。今回の調査地は線路の南側であるが、これまで実施されている調査の大半は北側で行われている。

遺跡の東には六甲山系に源を発して南流する芦屋川、高橋川が流れ、西には要玄寺川が流れるが、これまでの発掘調査で得られた成果から、遺跡内にはさらに複数の流路が存在していると考えられる。中でも芦屋川は、昭和13年の阪神大水害のような氾濫をたびたび繰り返してきたことで知られている。

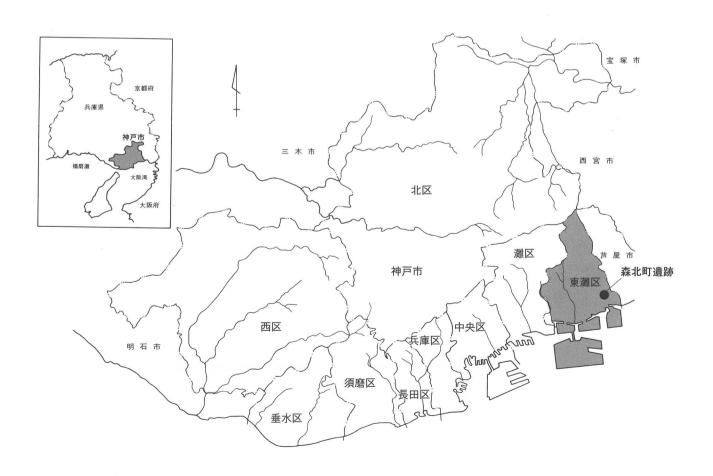


fig. 1 森北町遺跡の位置

(2) 周辺の遺跡

縄文時代

縄文時代早期は、芦屋市山芦屋遺跡で石囲炉が検出され押型文土器等が多数出土し、中期の竪穴住居も確認されている。また西岡本遺跡でも早期の竪穴住居が確認されている。 (3) 本庄町遺跡では近年、中期の遺物が後背湿地よりややまとまって出土している。また、後期初頭の貯蔵穴も確認されている。

北青木遺跡・本山遺跡・芦屋市寺田遺跡・芦屋市業平遺跡等では遺構の存在は明確でないが、後期・晩期の遺物が出土している。

弥生時代

弥生時代は、本山遺跡を中核遺跡として発展する。この遺跡は扇状地の末端に位置し、前期前半の土器や木製農耕具が大量に出土し、中期にかけても石包丁の製作が行われる等、長期間拠点集落として継続する。前期では他に、臨海部の海浜上に広がる北青木遺跡や、芦屋川右岸の扇状地に位置する寺田遺跡・業平遺跡等で集落が展開している。寺田遺跡ではサヌカイト・チャート片を多く含んだ竪穴住居や、貯蔵穴が発見されている。

そのほか、深江北町遺跡や、魚崎中町遺跡・住吉宮町遺跡においては後期の円形周溝墓群が確認されている。

古墳時代

古墳時代前期は、弥生時代後期後半から継続している遺跡が多く、本山遺跡・寺田遺跡 等があげられる。森北町遺跡もこの時期に盛行している。

中期は芦屋市月若遺跡において造り付けの竈を伴う竪穴住居が見つかっており、また滑石製模造品等が多数出土している。

墓域としては、前期に前方後円墳である扁保曾塚古墳が丘陵裾部に造られる。そして、中期~後期にかけては、扇状地末端の住吉宮町遺跡で小型方墳を主体とする群集墳が展開する。この遺跡は前方後円墳と考えられる坊ヶ塚古墳、帆立貝式古墳の住吉東古墳を頂点として、方墳群、墳丘をもたない箱式石棺墓群から構成される。

また、後期古墳としては、実態の不明であった岡本梅林古墳群で横穴式石室を埋葬施設とする古墳が築かれていることが近年明らかになっている。

奈良 平安時代

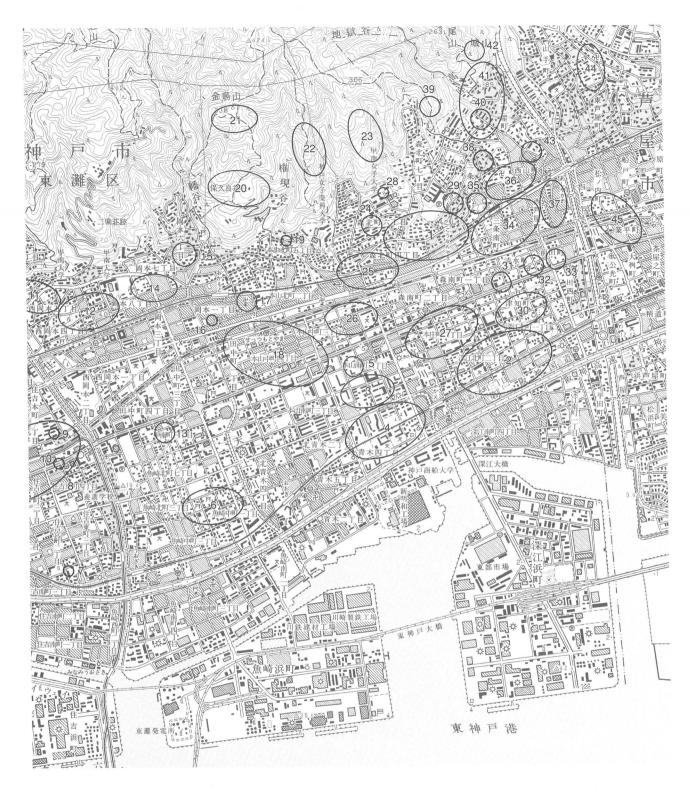
芦屋市芦屋廃寺遺跡からは、金堂の基壇と考えられる遺構が検出され、創建時期が白鳳期であることが判明している。また、深江北町遺跡・芦屋市津知遺跡は「葦屋駅家」に相当すると考えられ、「驛」の墨書土器・木簡・帯金具・馬歯等が出土している。

また、住吉宮町遺跡・寺田遺跡でも大型の掘立柱建物が確認されており、特に住吉宮町遺跡では「橘東家」と書かれた墨書土器が出土している。

そのほか、農耕祭祀が行われたと考えられる土坑が小路大町遺跡で発見されており、土 師器とともに馬鍬・ヒョウタンが出土している。

鎌倉時代

鎌倉時代に入ると、丘陵上を除く広い範囲で集落が形成されており、市街地の発掘調査によって、資料が年々増加している。近年、出口遺跡では13世紀代の木棺墓が発見され、青磁碗・鉄刀が出土している。



1.森北町遺跡

7. 東求女塚古墳 13.甲南町遺跡

19.生駒銅鐸出土地

25.出口遺跡

31.六条遺跡 37.月若遺跡

43.西山町遺跡

2.深江北町遺跡

8.住吉宮町遺跡 14. 岡本東遺跡 20.保久良神社遺跡

26.井戸田遺跡 32.清水町遺跡

38.冠遺跡 44.藤ヶ谷遺跡 9.坊ヶ塚古墳 15. 岡本梅林古墳 21.金鳥山遺跡 27.本庄町遺跡 33.前田遺跡 39.会下山遺跡

3.小路大町遺跡

45.業平遺跡

4.北青木遺跡 10.住吉東古墳 16.扁保曾塚古墳 17.本山北遺跡 22. 森奥遺跡

28.森銅鐸出土地 34.寺田遺跡 40.山芦屋遺跡

5.本山中野遺跡 11.西岡本遺跡

23.東山遺跡

29.三条岡山遺跡 35.三条九ノ坪遺跡 41.城山・三条古墳群 42.城山遺跡

6.魚崎中町遺跡 12. 岡本北遺跡 18.本山遺跡 24. 坂下山遺跡

30.津知遺跡 36. 芦屋廃寺遺跡

fig. 2 森北町遺跡と周辺の遺跡(S=1/25,000)

2. これまでの調査成果

森北町遺跡の発見は比較的早く、1940年代後半には弥生土器が採集されており、遺跡の存在が知られていた。1982年に初めて発掘調査が実施し、これまで19次におよぶ調査が行われている。

遺跡は弥生時代~中世後半と長期間継続するが、中心となる時期は弥生時代後期~古墳時代と考えられる。この時期は、竪穴住居・掘立柱建物や自然流路・土器溜り等の遺構が検出されており、特に第2次調査では前漢鏡片や韓式系土器が出土している。また、第10次調査では、竪穴住居・掘立柱建物等の遺構が検出されるとともに、他地域からの搬入土器や青銅製品が多く出土している。このほか、第14次調査では弥生時代後期後半の土器棺の出土も確認されている。これらのことから、弥生時代後期~古墳時代は大規模で拠点的な集落であった可能性が考えられている。

古墳時代後期~飛鳥時代に確認されている遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・水田である。 ただし、遺跡内全体に拡がっているとは考えにくい。また、平安時代以降は散在的に流 路・ピット等が確認されているに留まる。

以上のように、森北町遺跡は弥生時代後期~古墳時代前期に大規模な中核集落として発展する。これ以外の時期は多数の流路が確認されていることから明らかなように、たびたび洪水砂によって埋没し、集落域としてあまり機能していなかった可能性が考えられる。

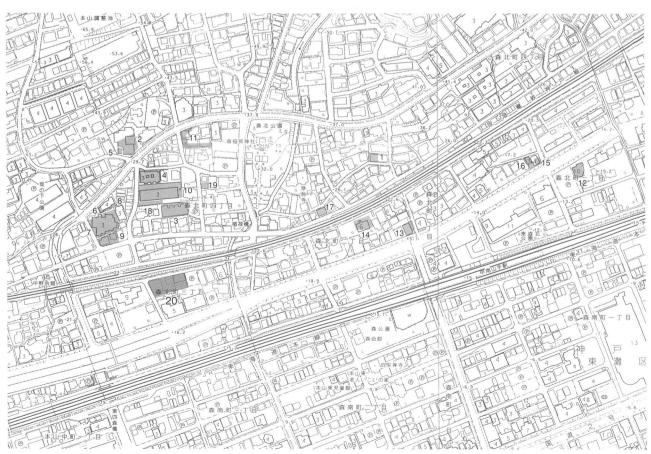


fig. 3 森北町遺跡調査地点(S=1/5,000)

3. 調査に至る経緯と経過

(1)調査に至る経緯

今回の調査対象地については、和田興産株式会社より提出された共同住宅「ワコーレ森 北町3丁目」の建設に伴う埋蔵文化財試掘調査依頼書(15121081)に基づき、平成15年 7月29日に試掘調査を実施した。5ヶ所に設定した試掘坑でいずれも遺物包含層が確認さ れたため、対象地全域で発掘調査が必要な旨、10月8日付け教育長名で回答した。

次数	調査年度	調査機関	面積(m)	調査内容
1	1982	神戸市教育委員会	200	弥生時代中期の溝
2	1985	神戸市教育委員会	500	古墳時代前期の竪穴住居、流路 古墳時代後期の竪穴住居
3	1987	神戸市教育委員会	50	弥生時代のピット、溝
4	1987	大手前女子大学考古学サークル	552	弥生時代~古墳時代の流路 古墳時代前期~中期の竪穴住居
5	1987	神戸市教育委員会	24	鎌倉時代のピット
6	1987	神戸市教育委員会	100	弥生時代末の流路 古墳時代中期の竪穴住居
7	1987	瀬戸内考古学研究所	1,327	弥生時代の流路
8	1988	神戸市教育委員会	10	銅鏃
9	1988	大手前女子大学内森北町 遺跡調査会	940	平安時代の流路
10	1989	神戸市教育委員会	1,300	弥生時代後期の竪穴住居、流路 古墳時代中期の竪穴住居 飛鳥時代の水田、掘立柱建物
11	1990	神戸市教育委員会	368	弥生時代の溝、土坑
12	1990	神戸市教育委員会	300	14世紀後半~16世紀の溝、土坑、流路
13	1994	神戸市教育委員会	50	ピット
14	1995	神戸市教育委員会	175	弥生時代後期末の溝、土坑、壺棺
15	1995	神戸市教育委員会	130	古墳時代後期~鎌倉時代の溝、土坑、ピット
16	1996	神戸市教育委員会	40	遺構なし
17	1997	神戸市教育委員会	55	弥生時代後期~後期末の溝
18	1997	神戸市教育委員会	100	弥生時代の竪穴住居、流路、土坑 古墳時代前期の流路
19	2001	神戸市教育委員会	34	弥生時代後期の溝、中世のピット
20	2003	神戸市教育委員会	645	古墳時代前期初頭の流路 平安時代〜鎌倉時代の掘立柱建物、土坑

表1 森北町遺跡調査一覧

I. はじめに

(2)調査組織(平成15·16年度)

神戸市文化財保護審議会 史跡考古担当委員

檀上 重光 前神戸女子短期大学教授

工楽 善通 大阪府立狭山池博物館館長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

教育長 西川和機(平成15年度) 小川雄三(平成16年度)

社会教育部長 高橋英比古

教育委員会参事

(文化財課長事務取扱) 桑原泰豊

社会教育部主幹 宮本郁雄(埋蔵文化財センター所長)

渡辺伸行 (埋蔵文化財指導係長事務取扱)

埋蔵文化財調査係長 丹治康明

文化財課主查 丸山潔 菅本宏明 千種浩 (保存科学担当 平成15年度)

事務担当学芸員 内藤俊哉 (平成15年度) 東喜代秀 (平成16年度)

調査担当学芸員 中居さやか

保存科学担当学芸員中村大介

遺物整理担当学芸員 谷正俊(平成16年度)

(3)発掘調査の経過

試掘調査の結果を受けて、共同住宅建設予定地645㎡について発掘調査を実施することで協議が整った。

平成15年11月10日には現場機材・資材を現地に搬入し、掘削の準備に取りかかる。残土置き場等の都合上、2分割して調査区を設定することとなり、東部約2/3をI区、西部約1/3をII区と便宜的に称した。

11月12日より I 区の重機掘削を行い、残土を搬出する(~18日)。重機掘削と並行して 遺構面の検出作業を東側より実施する。 I 区の東側は遺構の密度が低く、遺物の出土も少なかった。11月26日 I 区の全景写真を撮影し、ピットの断ち割り、平面図化作業を行う。

12月1日 II 区の重機掘削を行う。 II 区は I 区の様相と異なり、ピットを多数検出したことから、掘立柱建物が数棟並ぶことが想定された。また、SK08からは瓦器椀が完形品で出土するなどの成果があった。12月5日 II 区の全景写真を撮影し、ピットの断ち割り、平面図化作業を行う。

12月12日現地での発掘調査を完了し、出土遺物や発掘用資材等を神戸市埋蔵文化財センターに撤収する。12月15·16日再度残土を搬出し、完了通知とともに現地の引渡しを行う。 平成16年度は、改めて遺物整理作業を受託し、遺物水洗・整理作業、遺物実測作業、遺

構・遺物トレース作業、遺物写真撮影を実施し、発掘報告書を作成・刊行した。

3. 調査に至る経緯と経過

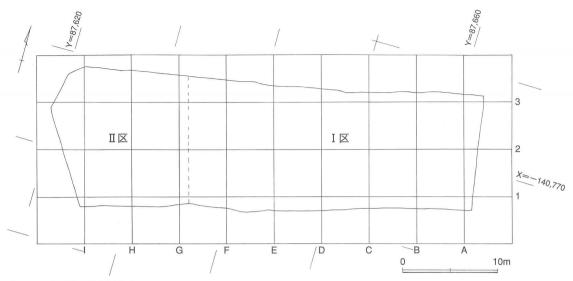


fig. 4 調査区地区割図



fig. 5 作業風景 (1)



fig. 6 作業風景 (2)

I. はじめに

I. 註

- (1) 芦屋市役所『新修 芦屋市史 本篇・資料編』 1976 森岡秀人・和田秀寿・白谷朋世『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』芦屋市教育委員会 1993
- (2) 浅岡俊夫『神戸市東灘区 西岡本遺跡』六甲山麓遺跡調査会 2001
- (3) 中居さやか『本庄町遺跡第9次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2003 別府洋三編『本庄町遺跡』兵庫県教育委員会 1991
- (4) 山下史朗編『北青木遺跡』兵庫県教育委員会 1986 菅本宏明·石島三和『北青木遺跡発掘調査報告書-第3次調査-』神戸市教育委員会 1999
- (5) 安田滋「本山遺跡第18・19次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998
- (6) 前田佳久・平田朋子・中居さやか『寺田遺跡発掘調査報告書第127・130・132・133地点』芦屋市教育委員会 2002 前田佳久ほか『寺田遺跡発掘調査報告書第132・133・137・139・141・142地点』芦屋市教育委員会 2003
- (7) 辻林浩ほか「業平遺跡(第25地点)」・小松譲ほか「業平遺跡(第26地点)」・鎌田勉ほか「業平遺跡(第27地 点)」・中村啓太郎ほか「業平遺跡(第29地点)」・吉田宣夫ほか「業平遺跡(第31地点)」『平成8年度年報』兵庫 県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997
- (8) 宮本郁雄「本山町東山遺跡」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987
- (9) 新修神戸市史編集委員会編「金鳥山遺跡」『新修神戸市史』歴史編 I 自然・考古 1989
- (10) 新修神戸市史編集委員会編「保久良神社遺跡」『新修神戸市史』歴史編 I 自然・考古 1989
- (11) 村川行弘・石野博信・森岡秀人『増補 会下山遺跡』芦屋市教育委員会 1985
- (12) 丹治康明・須藤宏「本山遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1992
- (13) 山下史朗編『深江北町遺跡』兵庫県教育委員会 1988 山本雅和編『深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2002
- (14) 岩田明広『魚崎中町遺跡 (第3次調査)』神戸市教育委員会 1997
- (15) 渡辺昇『住吉宮町遺跡群 I (坊ヶ塚遺跡)』兵庫県教育委員会 1989 丹治康明・須藤宏・東喜代秀「住吉宮町第9次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1989 安田滋編『住吉宮町遺跡第24・32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2001
- (16) 森岡秀人・木南アツ子『芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 月若遺跡(第19地点)』芦屋市教育委員会 1995 森岡秀人「月若町の先住者」『なりひら』芦屋市立美術館
- (17) 吉井良秀「摂津国武庫郡岡本村の小石棺に就いて」『考古学雑誌』3-11 1913 山口英正「岡本梅林古墳第1次調査」『平成14年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005刊行予定
- (18) 芦屋市教育委員会『芦屋廃寺跡(第62地点)発掘調査』現地説明会資料 1989
- (19) 井尻格『小路大町遺跡』神戸市教育委員会 2003
- (20) 黒田恭正「出口遺跡第6次調香」『平成14年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005刊行予定
- (21) 西岡巧次「森北町遺跡」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1985 黒田恭正「森北町遺跡」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988 富山直人「森北町遺跡第4次調査」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1990 丹治康明・須藤宏「森北町遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1992 安田滋・松林宏典「森北町遺跡」『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1993 佐藤康二・長屋幸二「森北町遺跡第12次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998 西岡誠司「森北町遺跡第13次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998 橋詰清孝「森北町遺跡第17次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999

Ⅱ. 遺構と遺物

1. 調査の概要

(1)調査の方法

調査区の設定は、掘削残土の仮置きの都合上、2 区に分割して実施し、調査を実施した順に I 区・I 区と呼んでいる。調査区の南東隅から北西に向かって 5 m方眼で、東西にA ~I 区、南北に 1 ~ 3 区の地区設定を行い、遺物の取り上げ等を実施している。調査の対象となる面積は上端で645 m°であったが、調査区が傾斜地に位置し、盛土が厚く堆積していることから、安全勾配を多くとっている。そのため、実際の調査面積は516 m²となった。

遺構は平安時代後期~鎌倉時代を中心としており、すべて同一面で検出した。検出した 遺構の中で最も古いものは古墳時代前期の遺物が摩滅した状態で出土している流路1条 (SR01)のみである。また、遺物包含層から出土した遺物の大半は、12世紀後半~13世 紀中頃の範疇におさまるものである。

(2) 基本層序

現況地盤は盛土のためにほぼ平坦となっているが、地形的には北から南に傾斜し、調査によって確認した遺構面は北部で標高17.9m、南部では17.3mと、比高差は約0.6mを測る。また、調査区の西には現在水路が流れ、出口遺跡との境となっているが、遺構面では西から東へと緩やかに傾斜している。

調査区東壁での層位は、厚さ1.0m以上の盛土・撹乱層の下、0.5~0.7mの旧耕土・床土層をはさんで、淡褐灰色石混じり砂質土(遺物包含層)、褐灰色粘性砂質土(遺構面)、淡青灰色粗砂混じり砂質土となっている。調査区の東部では、遺物包含層である淡褐灰色石混じり砂質土層は遺物が少なく、遺構も非常に希薄であった。また、調査区の南東部では遺構面の下層である淡青灰色粗砂混じり砂質土層から湧水が確認され、安定した土壌でなかったことがわかる。

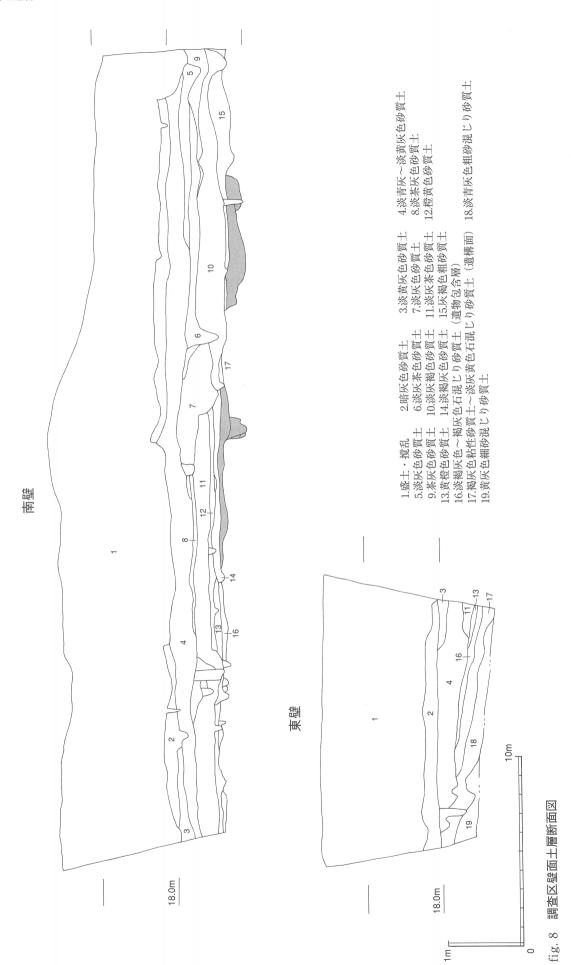
調査区の南壁での層位は、盛土の下層から遺物包含層上層まで、耕土・床土層が何層にもわたって厚く堆積し、後世の暗渠等も確認した。特に南西部には南東部よりも時期の新



fig. 7 調查区南壁

しい耕土層が堆積しており、近世以降耕作地であったことがわかる。西部の遺構面は東部に比べ、粘性の低い、安定した淡灰黄色石混じり砂質土となっており、部分的にはマンガン成分を確認した。

なお、調査区中央南壁に断ち割り調査を実施しているが、下層に遺物を含む土壌化層を確認することはできなかった。遺構面の下層は、淡灰色石混じり粘質土、淡灰橙色礫混じり粘質土、青灰色粘土となっており、青灰色粘土層は遺構面より約0.8m下層で確認した。



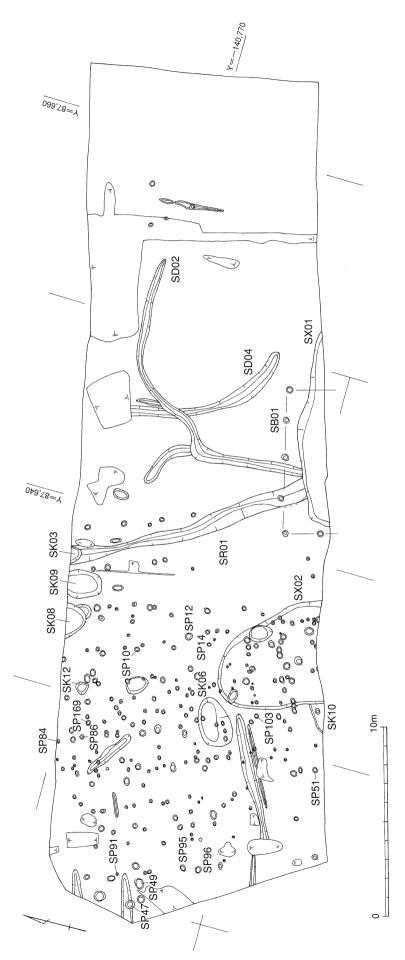


fig.9 調査区の遺構

Ⅱ. 遺構と遺物

2. 遺構と遺物

調査区で検出した遺構には、掘立柱建物、ピット、溝、土坑、落ち込みがある。

調査区の東部は、遺構面下層の淡青灰色粗砂混じり砂質土層から湧水が確認できることからも、あまり安定した土壌とはいえず、溝を数条検出したに留まる。西部については、 東部より標高が高く、安定した土壌となっている。遺構の大半は西部で検出している。

(1) 掘立柱建物

調査区の西部では、柱穴がまとまって検出され、総柱建物 5 棟、側柱建物 4 棟の合計 9 棟の掘立柱建物が確認できた。

柱穴は直径 $0.2\sim0.6$ m、深さは深いもので0.6mを測る。柱痕の残存しているものが全体の約1/3程度あり、礫や木によって礎盤としているものも若干検出している。残存する柱痕の直径は0.1mを測るものが多く、柱材が残存しているものはなかった。

掘立柱建物は切り合い関係にあるため、少なくとも 4 時期の時期差が考えられる。ただ し、柱穴の直径・深さや埋土にあまり違いはみられない。

柱間は、芯々距離でほぼ1.8~2.2mの範囲に収まる。建物方向は桁行で座標北より、東へ振っているものが大半であった。

柱穴埋土からの出土遺物には土師器・須恵器・瓦器があり、磁器も少量出土している。いずれも細片で、図化困難なものが多い。このため、切り合う建物の前後関係は判明していないが、概ね12世紀後半~13世紀中頃の範疇に収まる時期と考えられる。



fig. 10 掘立柱建物

SB01

 $D \cdot E - 1$ 区で検出した 1 間以上× 4 間の東西棟の掘立柱建物で、調査区外へと拡がる。柱間は芯々距離で梁行1.9m、桁行1.7~2.2mを測る。柱穴は直径0.3~0.4m、深さ0.1~0.3mを測り、柱痕はいずれも確認できない。桁行はN75° Eである。

p5より黒色土器A類の椀が出土している(1)。口径13.7cm、器高6.5cmを測る。内面は横方向の細かいヘラミガキを施し、外面はナデ調整を施す。SB01の検出面は他の遺構に比べ高く、またSB01の柱穴や他の建物、遺物包含層から同時期の遺物はまったく出土していない。このため、この1点の遺物でSB01の時期を決定することを積極的にはいえない。



fig. 12 SB02

Ⅱ. 遺構と遺物

SB02

 $E \cdot F - 2 \cdot 3$ 区で検出した 2 間× 3 間の東西棟の掘立柱建物である。建物規模は 7.1×4.25 mを測る側柱建物である。柱間は芯々距離で梁行 $1.8 \sim 2.1$ m、桁行は $1.75 \sim 2.9$ mと幅広いが、2.0m程度のものが多い。桁行はN68°30′Eである。柱穴は直径 $0.2 \sim 0.5$ m、深さ $0.3 \sim 0.5$ mを測る。

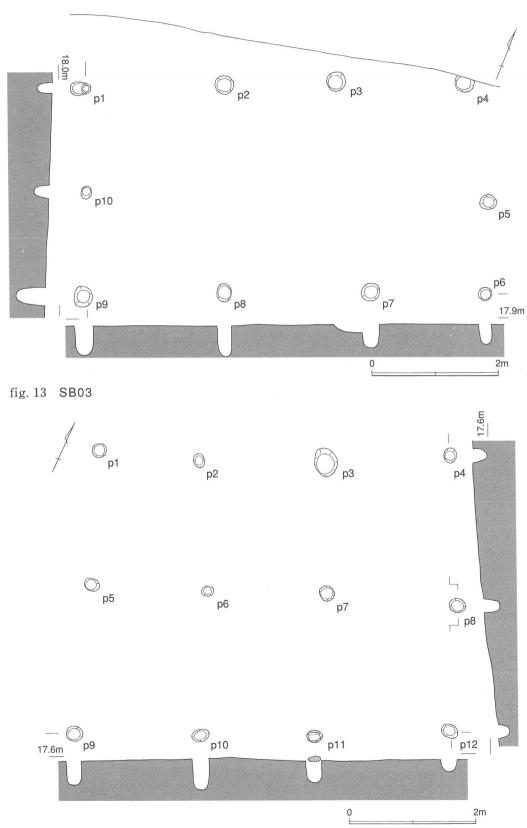


fig. 14 SB04

p1より瓦器羽釜 4 が出土している。口径27.6cmを測り、1/6 程度残存している。内外面にはナデ調整が確認できる。

SB03

 $G \cdot H - 2 \cdot 3$ 区で検出した 2 間× 3 間の東西棟の掘立柱建物である。建物規模は 6.8×3.5 mを測る側柱建物である。柱間は芯々距離で梁行 $1.45 \sim 1.9$ m、桁行は $1.75 \sim 2.3$ mを測る。桁行は $N67^\circ$ Eである。柱穴は直径 $0.15 \sim 0.3$ m、深さ $0.2 \sim 0.5$ mを測る。

p2より土師皿2が出土している。口径7.8cm、器高1.4cmを測る。

SB04

G・H-2 区 で検出した 2 間×3 間の東西棟の総柱掘立柱建物である。建物規模は 6.15×4.7 mを測る。柱間は芯々距離で梁行 $2.05\sim2.4$ m、桁行 $1.6\sim2.15$ mを測る。桁行は N65° Eである。柱穴は直径 $0.18\sim0.4$ m、深さ $0.2\sim0.5$ mを測る。

p1より鉄製品が出土している (53)。

SB05

F・G-1区で検出した 2 間×3間の東西棟の総柱掘立 柱建物である。建物規模は 6.2×4.1mを測る。柱間は 芯々距離で梁行1.75~2.1m、 桁行1.6~2.2mを測る。桁行 はN70°30′Eである。柱穴 は直径0.12~0.4m、深さ0.2 ~0.6mを測る。

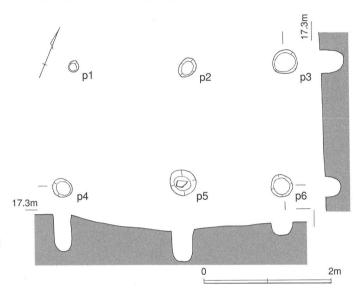


fig. 15 SB06

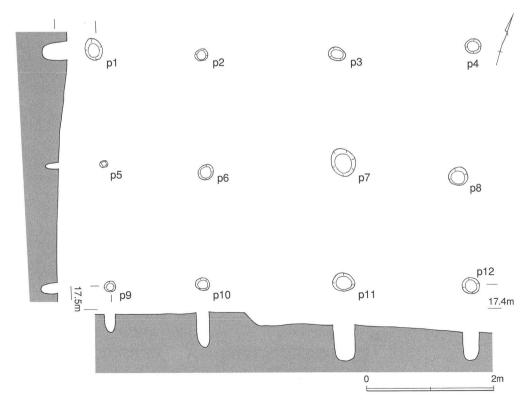


fig. 16 SB05

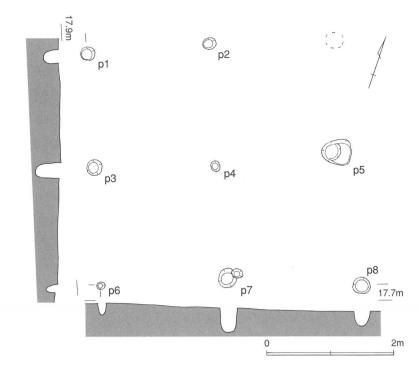


fig. 17 SB08

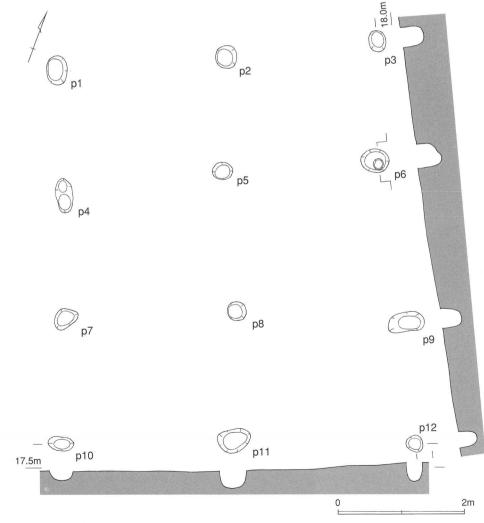


fig. 18 SB07

SB06

 $F \cdot G - 1$ 区で検出した 1 間× 2 間の東西棟の掘立柱建物である。建物規模は 3.8×2.3 m を測る。柱間は芯々距離で梁行 $1.9 \sim 2.0$ m、桁行 $1.5 \sim 1.9$ mを測る。桁行はN67° 30′ E である。柱穴は直径 $0.16 \sim 0.4$ m、深さ $0.2 \sim 0.6$ mを測る。

p1より瓦器皿 3 が出土している。口径12.2cm、器高3.1cmを測る。内面はヘラミガキ、外面はナデ調整を施す。

SB07

 $H \cdot I - 2 \cdot 3$ 区 で検出した 3 間× 2 間の南北棟の掘立柱建物である。建物規模は 5.9×6.6 mを測る。柱間は芯々距離で梁行 $1.9 \sim 2.5$ m、桁行 $2.4 \sim 2.8$ mを測る。桁行はN68° Eである。柱穴は直径 $0.16 \sim 0.4$ m、深さ $0.2 \sim 0.6$ mを測る。

SB08

 $G \cdot H - 2$ 区で検出した 2 間× 2 間の掘立柱建物である。北東隅の柱穴は検出できていない。建物規模は 4.3×3.85 mを測る。柱間は芯々距離で $1.8 \sim 2.1$ mを測る。桁行はN71° Eである。柱穴は直径 $0.14 \sim 0.5$ m、深さ $0.2 \sim 0.4$ mを測る。

SB09

fig. 19 SB09

H-2 区で検出した 3 間× 2 間の南北棟の掘立柱建物である。建物規模は 4.62×6.0 mを測る。柱間は芯々距離で梁行 $1.9\sim2.5$ m、桁行 $1.75\sim2.0$ mを測る。梁行はN71° Eである。柱穴は直径 $0.14\sim0.25$ m、深さ $0.14\sim0.4$ mを測る。

(2) 掘立柱建物に伴わないピット

調査区内では、建物に伴わないピットも多数あるが、その中で図化可能な遺物が出土したピットについてのみ報告する。ピットから出土した遺物には土師器・須恵器・瓦器があ

る。最も多く出土しているのが土師 器で、次いで瓦器であった。

土師器皿の出土しているピットの埋土は、SP47が褐灰色砂質土、SP169が淡褐色粗砂質土である。土師器皿は口径9.0cm程度のもの(5~8)と、12.0cm程度のもの(9・10)の2種類出土しており、大半は9.0cmの小型の土師器皿であった。

須恵器は12が図化可能であった。 SP12から出土している。SP12は直径0.5m、深さ0.7mを測り、ピットの中でも大きい部類に入る。埋土は灰褐色石混じり粗砂質土、灰褐色炭混じり粗砂質土、暗灰色砂質土に分層できる。12は口径16.0cm、器高5.1cmを測る。口縁端部は丸く収め、底部には回転糸切り痕が確認できる。全体に摩滅しているがナデ調整を施す。

Ⅱ. 遺構と遺物

瓦器の出土したピットの埋土は、SP86が淡灰色石混じり粗砂質土、SP51が淡灰茶色砂質土・黄褐色砂質土である。瓦器は6点図化可能であった(11・13~17)。13は口径13.8cm、器高4.9cmを測る。出土した瓦器の中で最も高台が安定している。14は口径10.4cm、器高3.2cmを測り、口径が小さい。16は口径13.2cm、器高3.4cmを測り、浅い。ピット出土の瓦器の調整は摩滅のため明確ではないが、口縁部外面は横方向のナデ調整を施し、口縁部内面にはヘラミガキが確認できる。見込みまでヘラミガキを施すものは、図化したもの以外を含めてもほとんど確認できていない。外面にはユビナデ成形の痕跡が残る。13・17は高台の断面が四角形でしっかり安定しているが、他の3点は断面が三角形もしくはほとんど形骸化している。

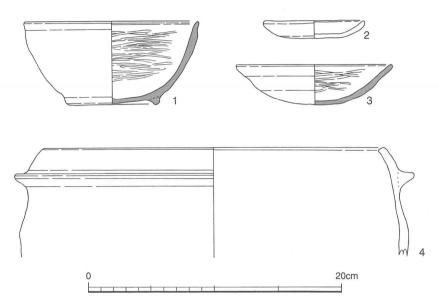


fig. 20 掘立柱建物出土遺物

(1:SB01-p5 2:SB03-p2 3:SB06-p1 4:SB02-p1)

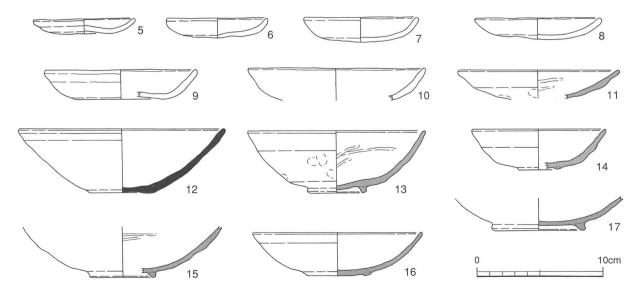


fig. 21 ピット出土遺物

(5:SP84 6:SP47 7:SP169 8·10·12:SP12 9:SP91 11·16:SP49 13·15·17:SP86 14:SP51)

(3)溝

調査区の東部では、遺構が希薄であったものの、溝を数条検出した。深さはいずれも約0.2mで、遺物をあまり含んでいない。柱穴とはほとんど切り合い関係がないものの、淡灰色粗砂質土の埋土をもつなど、柱穴より時期が遡るものと考えられる。

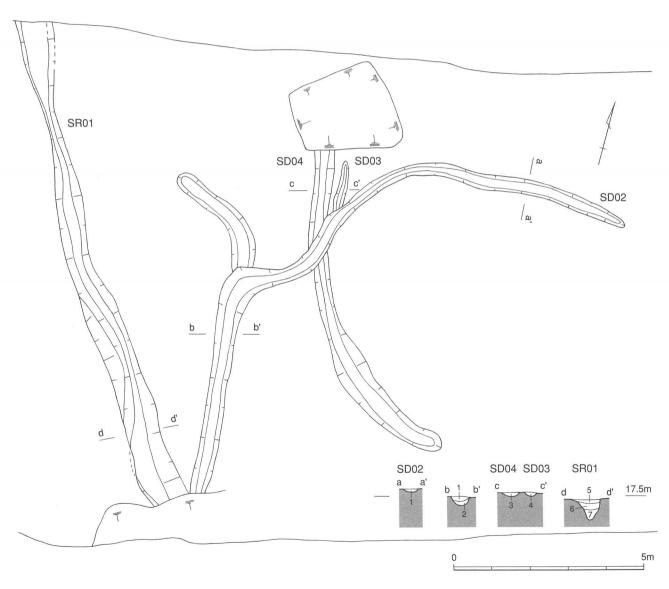
また、調査区の西部、柱穴と切りあって検出された溝については、柱穴より新しく、方向が東西にそろっていること等から、鋤溝等の耕作痕跡と考えられる。幅0.1~0.2m、深さは約0.1mを測る。道具等の痕跡は確認できていない。

SD02

B~D-1・2 区で検出した、蛇行する溝である。幅0.3~0.5m、深さ0.1~0.2mを測る。SX01・SR01に切られている。

SD04

 $D-1\cdot 2$ 区で検出したやや弧を描く溝である。幅 $0.5\sim 0.9$ m、深さ0.1mを測る。SD02 と切り合う。



1.淡茶灰色粗砂質土 2.淡灰茶色石混粗砂質土 3.淡灰褐色石混じり粗砂質土 4.淡灰茶色粗砂質土 5.淡灰色粗砂 6.茶黄色礫混粗砂 7.淡灰色細砂~中砂(茶色粗砂ラミナ)

fig. 22 SD02~04, SR01

SR01

E-1~3 区で検出したこの溝は、幅0.3~1.1m、深さは最も深いところで0.5mを測る。 埋土は他の溝と異なり粗砂や細砂で、南壁面際は特に湧水が激しい。調査区を北から南へ と蛇行し、屈曲部で深く抉れた形状になることから、流路と考えられる。SD02と南壁で 切り合う。

また、SX01は埋土の状況から、SR01が堆積していく段階で、オーバーフロウ等によっ て形成された遺構の可能性が考えられる。古墳時代前期と考えられる摩滅した状態の土師 器の高坏の破片が、埋土の中層より出土している。

(4) 土坑・落ち込み

調査区の西部で土坑・落ち込みを12基検出した。この中で図化可能な遺物が出土した土 坑についてのみ報告する。

SK03

F-3区で検出した。SR01と切り合い、調査区外へと拡がる。直径は0.8m、深さ0.4m を測る。埋土上層で土師器皿が拳大の礫とともに出土している。

土師器皿28が出土している。口径11.8cm、器高2.3mを測る中型の土師器皿である。口 縁部外面はヨコナデ調整によってやや凹む。

SK06

G-2 区で検出した不整形な土坑で、長径2.6m、短径1.8m、深さ0.1mを測る。底面は 北側がやや落ち込むが、おおむね平坦である。埋土は灰褐色粗砂質土、淡灰色砂質土、淡 灰黄色砂質土である。柱穴がSK06の底面で検出できることからSB04・05より後出である。

土師器皿26と瓦器椀38が出土している。26は口径9.0cm、器高1.6cmを測る。38は口 径17.0cm、器高4.5cmを測る。外反して立ちあがり、調整は摩滅により不明である。

SK08

F-3 区で検出した。調査区外へと拡がる。深さ0.2mの不整形な土坑の中に、さらに直 径0.5mを測る円形の落ち込みがあり、瓦器椀 3 点が完形で出土している(32~34)。ただ し、最上層の椀32は他の2点と比較して間層に土が多く入り込んでいるため、同時期に 据え置かれたものでない可能性が考えられる。底面側面には直径0.1m程度の礫がややま とまって出土している。遺構面からの深さは0.4mを測り、湧水が確認された。井戸状の 遺構と仮定するならば、廃絶する際に据え置かれた可能性が考えられる。また埋土からは 土師器皿も出土している。

土師器皿19~21は口径 8.2~8.6cm、器高1.2~ 1.4cmを測る小型のものが 出土している。

瓦器椀31~34は口径 14.3~15.0cm、器高4.5~ 5.0cmを測る。いずれの瓦 器椀もほとんど内弯するこ となく外反気味に立ちあが り、高台は断面三角形であ る。他の遺構から出土して いる瓦器には見られない見 fig. 23 SK08・09



SK09

込みにも圏線ヘラミガキが明瞭である。32・34は外面に被熱のための剥離が確認できる。

F-3 区で検出した楕円形を呈する土坑である。北端は調査区外へと拡がり、長径約1.0m、短径0.7m、深さ0.1mを測る。底面は平坦で、埋土は灰褐色粗砂質土、暗灰色粘質土である。

土師器22~25、瓦器35~37・39、青磁40・41が出土している。

土師器皿は22~24が口径8.4~8.6cm、器高1.5~1.6cmを測る。22は完形で出土している。25は口径9.6cm、器高1.5cmを測り、他の3点に比べやや大きい。

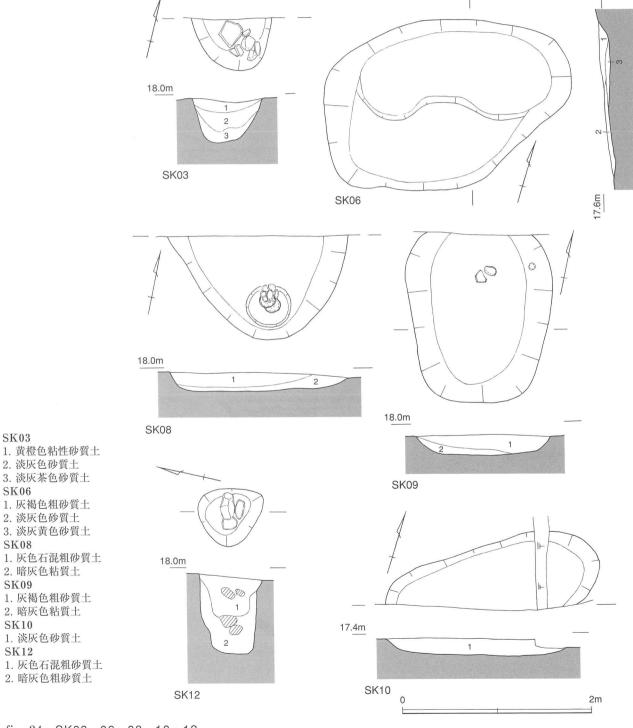


fig. 24 SK03 · 06 · 08 ~ 10 · 12

Ⅱ. 遺構と遺物

瓦器椀35は口径14.4cm、器高3.7cm、37は口径13.8cm、器高3.8cmを測る。36は口径12.2cm、器高3.2cmを測り、口径が非常に小さい。またいずれの瓦器椀も他の遺構と比較して器高が浅く、高台も形骸化しており、後出する要素が強い。

青磁碗40は龍泉窯系の輸入磁器で、41は同安窯系の輸入磁器と考えられる。

SK10 G-1 区で検出した。SX02と切り合い、南半は調査区外へと拡がる。長径2.3m、深さ 0.2mを測る。底面は平坦で、埋土は淡灰色礫混じり砂質土である。

土師皿18が出土している。口径8.2cm、器高1.1cmを測る。

SK12 G-3 区で検出した。直径0.7m、深さ0.8mを測る。埋土は灰色石混じり粗砂質土・暗灰色粗砂質土の2層に分かれる。埋土の上層及び中層に人頭大の礫を少量含み、平坦な底面では有機物の痕跡が確認できた。

湧水層に達しているため、井戸が削平を受けたものであった可能性も考えられる。有機 物は残存状況が悪く、取り上げることはできなかったが、曲物の可能性も考えられる。

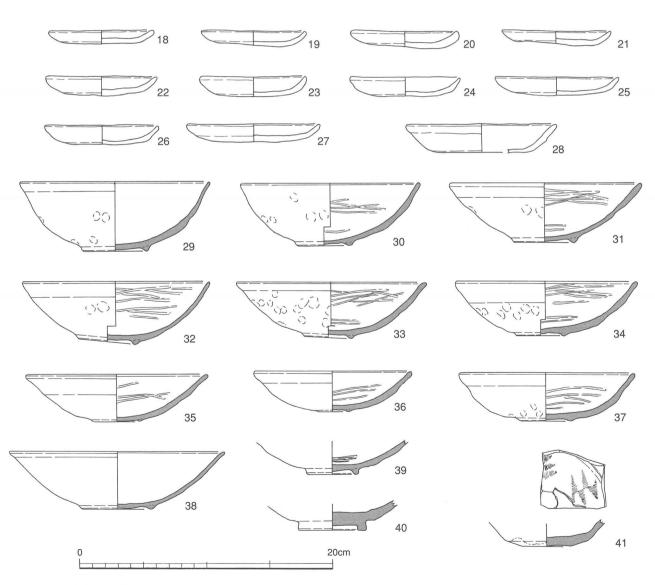


fig. 25 土坑出土遺物

 $(18:SK10 \quad 19 \sim 21 \cdot 31 \sim 34:SK08 \quad 22 \sim 25 \cdot 35 \sim 37 \cdot 39 \sim 41:SK09 \quad 26 \cdot 30 \cdot 38:SK06 \quad 27 \cdot 29:SK12 \quad 28:SK03)$

土師器皿27は口径10.4cm、器高1.4cmを測る。瓦器椀29は内弯して立ちあがり、口縁部は外面のナデ調整によってやや外反して端部は丸く収める。内面調整はヘラミガキと思われるが、摩滅のため判明しない。出土遺物は少ないものの、他の土坑出土の遺物に比べて古い要素が強い。

SX02

F・G-1 区で検出した不整形な落ち込みである。南側は調査区外へと拡がる。断面は 皿状を呈し、深さは最も深いところで0.2mを測り、茶褐色砂質土の埋土をもつ。埋土に は土師器・須恵器・瓦器を多く含み、金属製品も出土している。柱穴SB05-p7・8・11・12、SB06-p1~6がSX02の底面で検出されることから、SX02はSB05・06を切って掘 削された遺構と考えられる。

土師器42~44、瓦器45~48、須恵器49、土錘50~52が出土している。

土師器皿は口径8.8~9.0cm、器高1.0~1.3cmを測る。

瓦器椀45・46の高台は非常に形骸化しており、3.0cm前後と器高も浅い。口径は12.2~12.8cmを測り、内面のヘラミガキは摩滅しているものもあるが(45)、残存しているものは粗くしか施していない。後出的な要素が強く、遺物が出土している遺構の中では、最も新しい遺構と考えられる。

49は口径19.0cmを測る須恵器鉢である。口縁端部は外傾して面をもち、底部には回転 糸切り痕が確認できる。

50~52は直径0.2~0.3cmの孔をもつ有孔土錘である。他の遺構からは出土していない。

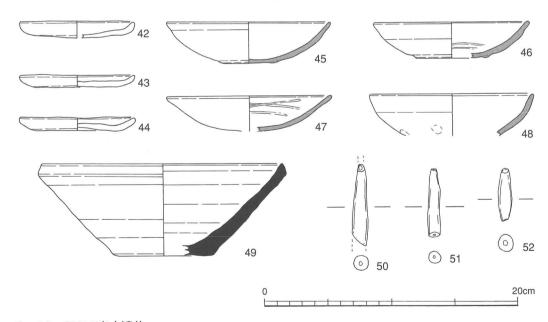


fig. 26 SX02出土遺物

3. 金属製品

森北町遺跡第20次発掘調査では金属製遺物が4点出土しており、いずれも鉄製品である。 53は幅広の楔形を呈する鍛造鉄製品であり、先端部の8.6cmが残存している。厚さは 4mmの板状で、平面形は残存部上端幅が1.7cmの細長い三角形を呈する。SB04-p1から 出土している。

54~56はいずれも鍛鉄製の角釘である。54は頭巻釘で残存長5.3cm、身部の太さ4mmを測る。頭部は先端が折損しているが、厚さ1mmに打ち延ばされており湾曲している。通常、打ち込まれた頭巻釘の頭部は巻き込みまたは屈曲が著しいため、未使用のものが何らかの事由で湾曲した可能性がある。55は頭巻釘で、残存長5.2cm、身部の太さ4.5mmを測る。頭部は折損しているため巻き込みの状況は不詳であるが、基部との境の断面からは折れ曲がった状況が観察でき、打ち込まれたものであることがわかる。56は角釘である。両端部が欠損しており、どのような頭部形状であったかは不明である。残存長4.5cm、太さ5mmを測る。54はSP14から、55はSX02から、56は遺物包含層出土である。

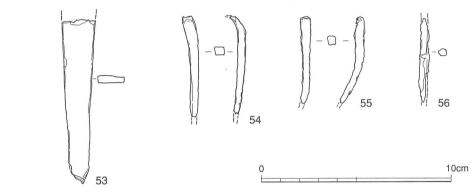


fig. 27 出土金属製品

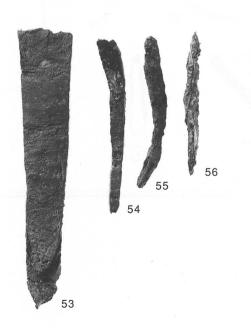


fig. 28 出土金属製品

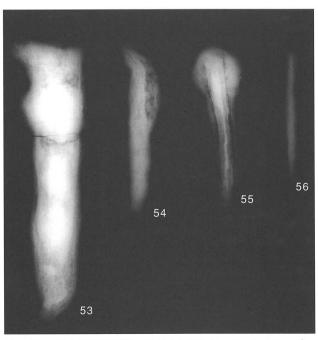


fig. 29 同左X線透過像(IX100,60kVp,3mA,40sec)

Ⅲ. まとめ

これまで報告したように森北町遺跡第20次調査は、多くの成果が得られた。最後に今回 の調査で確認された成果を簡単にまとめたい。

1. 遺構について

今回の調査では12世紀後半~13世紀中頃の掘立柱建物を9棟検出した。森北町遺跡内でこれまで実施されている調査では同時期の遺構があまり検出されていなかったが、この時期の集落がこの遺跡内にも営まれていたことが明らかになった。これは、これまでに実施されてきた調査の多くが、標高20m付近では実施されていなかったことと関係すると考えられる。つまり、中世の遺構は阪急神戸線より南側の緩斜面に広がると考えられよう。このことは、今回の調査地に西接する出口遺跡において、同時期の掘立柱建物・土坑・ピット・木棺墓等が検出されていることからも補強できる。今後、遺跡の内容を見極めた上で、隣接して遺跡が存在する場合は、その範囲の見直しも必要であろう。

2. 遺物について

今回の調査地で出土した遺物の大半は瓦器である。この時期の神戸市内の遺跡からは、いわゆる東播系の須恵器が出土することが多い。もちろん須恵器の器種は椀・鉢・甕などであり、瓦器が皿・椀を中心とすることから、器種構成が異なり一概に比較することはできないが、土師器の皿・椀をしのぐほどに瓦器が出土していることには、注意が必要であるう。

遺物の大半が瓦器であることから瓦器で変遷を追うと、出土している瓦器椀は、やや内弯する立ちあがりのものから、外反するものへと変化する。高台は断面が四角く安定した形状のものから、断面三角形のもの、ほとんど痕跡を残す程度のものへと変化している。中でも、断面三角形のものが大半を占める。また口径は約15.0cmから約13.0cmへと小さくなり、器高も約5.5cmから約4.0cmへと浅く変化している。

以上より、12世紀後半~13世紀中頃の様相を示していると考えられる。また、口縁端部の形状から和泉型と考えられる。掘立柱建物の時期は土器があまり出土していないため判明しないが、遺物が出土している遺構の変遷はSK12→SK08→SK09→SX02と考えられる。

ではここで周辺遺跡から出土している同時期の遺物と比較を試みる。

芦屋市寺田遺跡第139地点では、6棟の掘立柱建物が検出され、周辺の土坑からは多くの土器が出土している。特に阪神間では出土例の少ない黄釉鉄絵盤が出土していることは注目される。出土遺物の大半は土師器皿と瓦器椀であり、鍋・釜類の出土は少量とある。須恵器の少ない器種構成は今回の調査地と同様の傾向といえる。

八幡遺跡(灘区所在)は、石屋川と都賀川にはさまれた扇状地に位置する。この遺跡からは5棟の掘立柱建物とともに、土師器皿、瓦器椀、須恵器椀・鉢・甕、磁器碗が出土している。遺物の総量は少ないものの、今回の調査地より須恵器の割合がやや多い器種構成となっている傾向がうかがえる。

祇園遺跡 (兵庫区所在) は、天王川左岸の扇状地の扇頂付近に位置する。これまでの調査から京都産の瓦等が多く出土しており、福原京に関係する遺跡と考えられている。第5次調査SX07 (園池遺構) から出土している土器の器種構成は報告書によると、9割以上を土師器皿が占めている。また瓦器椀は高台の形状や、外面にヘラミガキ等がみられることから、今回の調査地より時期的にやや古い様相を呈している。土師器皿の出土が最も多いのは、この遺跡の特殊性によるものと考えられる。

大開遺跡(兵庫区所在)は、湊川右岸の沖積地に位置する遺跡である。第1次調査で 検出された井戸からは、土師器皿・甕、瓦器椀、須恵器椀、磁器碗、褐釉陶器壺が出土している。いずれも少量のため、数量の傾向を読み取ることはできなかった。

また、第4次調査の井戸からは、土師器皿、瓦器椀、須恵器椀が出土している。瓦器椀は外面にもヘラミガキがみられる等、今回の調査地よりやや時期の古い様相を呈する。器種構成は、土師器皿、瓦器椀、須恵器椀ともにほぼ同数の傾向を示す。

二葉町遺跡(長田区所在)は、妙法寺川と苅藻川によって形成された自然堤防上に位置する遺跡で、11世紀末~13世紀前半の時期を中心とした集落である。これまでに実施された調査面積は広く、掘立柱建物、井戸、墓、耕作地等集落の構成がわかる様相で検出されている。この遺跡から出土した遺物は、土師器・須恵器・瓦器・磁器の他に土錘・蛸壺といったものが含まれていることは、港に隣接していることからも注目される。また、土師器皿、瓦器椀、須恵器皿・椀の数量は須恵器が半数を占め、あとの半分を土師器、瓦器が補う様相を呈する。

以上、六甲山南麓の神戸市内の遺跡を中心に土師器・瓦器・須恵器の数量による比較を試みた。遺跡によって調査面積が異なり、また、残存状況のよい図化可能な遺物の数量による比較であるため、遺物の総量とは異なる可能性も考えられる。そのため、単純な比較はできないが、東から西の遺跡へいくにつれて、瓦器の割合が減少するという従来より言われている傾向を認めることができそうである。

Ⅲ. 註

- (1) 黒田恭正「出口遺跡第6次調査」『平成14年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005刊行予定
- (2) 前田佳久ほか『寺田遺跡発掘調査報告書第132・133・137・139・141・142地点』芦屋市教育委員会 2003
- (3) 東喜代秀「八幡遺跡」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
- (4) 富山直人『祇園遺跡第5次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2000
- (5) 前田佳久編『大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1993
- (6) 富山直人「大開遺跡第4次調査」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1995
- (7) 川上厚志編『二葉町遺跡発掘調査報告書第3・5・7・8・9・10次調査』神戸市教育委員会 2001

写真図版



調査地全景(南西から)



調査地全景(東から)



SB07~09 (北から)



SD02~04・SR01 (北西から)



SK03 (南から)



SK08 (南から)

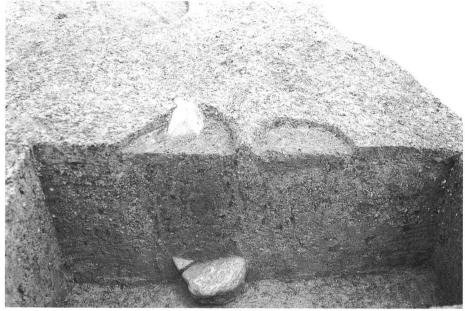


SK08断ち割り(西から)

図版 4



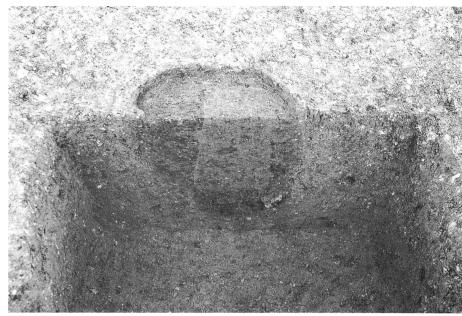
SB05-p6・SP103(西から)



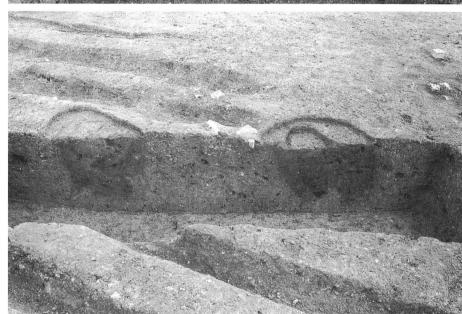
SB04-p10・SB09-p12 (南から)



SB06-p2・SP129(東から)



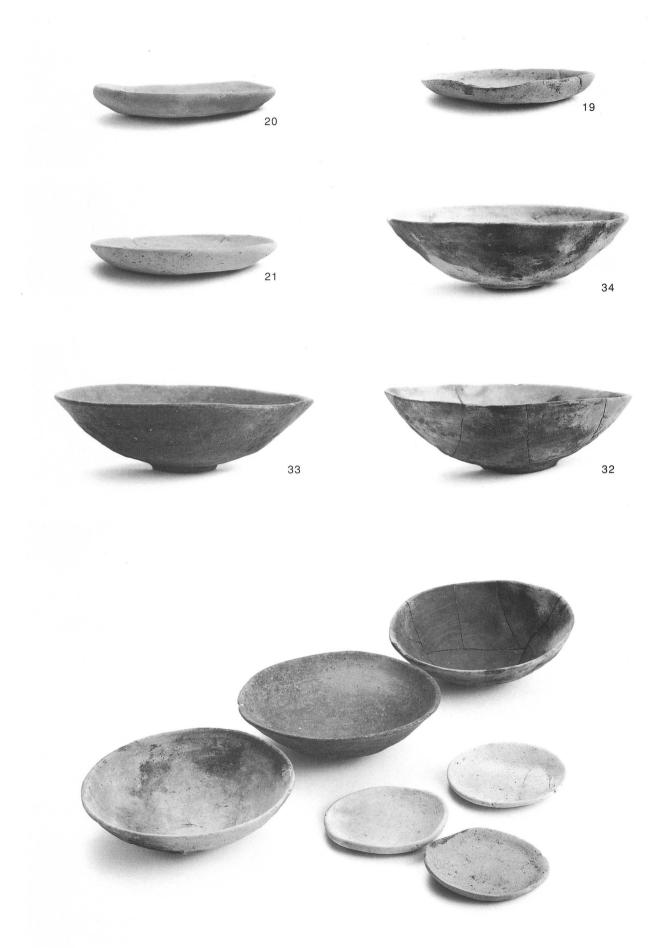
SB09-p4(南から)



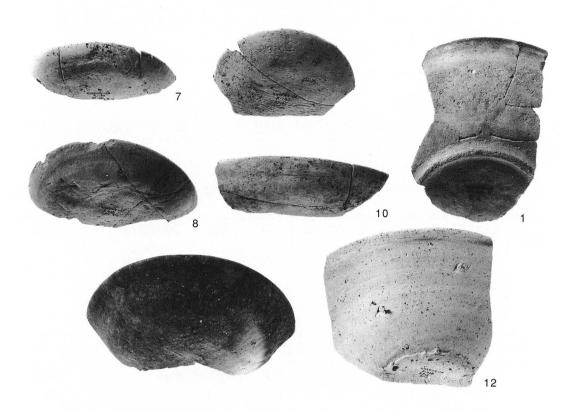
SP95・SP96 (西から)



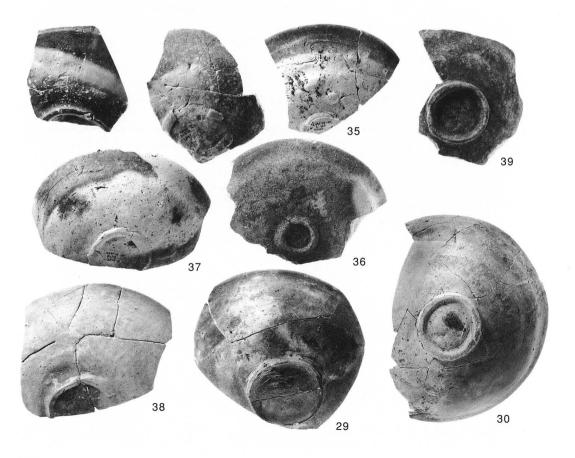
SP12 (南から)



SK08出土土器



ピット出土土器



土坑出土土器

報告書抄録

ふりがな	もりきた	まちい	せき だ	い20じち	ょうさ	はっく	つちょうさほ	うこくし	しよ
書 名	森北町遺跡 第20次調査 発掘調査報告書								
編著者名	中居さやか 中村大介								
編集機関	神戸市教育委員会								
所 在 地	也 〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL.078-322-6480								
発行年月日	西暦2004	4年 12月	31日						
所収遺跡名	所在	地		ード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面	
森北町遺跡	ひょうごけん	こうべし	28100	10 - 40	34°	135°	20031110		民間
	がしなだくま	もりきたまち 森北町			43′	17'	20031216	645	マンション 建設事業
	3丁目4				37"	25"	20001210		之似于水
所収遺跡名	種別	主な	時代	主な遺	構		主な遺物		特記事項
森北町遺跡	集落	古墳時鎌倉時	代初頭代	古墳時代初頭溝		古墳時代初頭 土師器			鎌倉時代の 掘立柱建物
				鎌倉時代 掘立柱建物・ 土坑		鎌倉時代 土師器・須恵器・瓦器・ 磁器・金属器			

森北町遺跡 第20次調査 発掘調査報告書 2004·12·31

発行 神戸市教育委員会文化財課 神戸市中央区加納町 6 丁目 5 番 1 号 TEL 078 - 322 - 6480
印刷 岡村印刷工業株式会社 大阪市住吉区長居東 3 丁目 4 番17号 TEL 06 - 6697 - 3375

